

主体的な読み手を育てる

—— 図書館との連携を通じて ——

新田 涼子

1 テーマ設定の動機

本校では「確かな学力の向上」「自尊感情を高める仲間づくり」などを柱に校内研究をすすめている。その中で、私自身が国語科として、また司書教諭としてできるアプローチとは、学びに向かう姿勢である「主体性」を伸ばすこと、仲間づくりや言語活動の基盤となる「表現力」を豊かにすることだと考えた。国語の授業や読書活動を通してそれらを育みたいと思い、このテーマを設定している。

2 「主体的な読み手」を育てるために

まず「主体的な読み手」とはどういった姿を指すの

か。「主体的」と「自主的」の違いについて考えてみた。辞書の意味は以下の通りである。

主体（名）

①（自分の意思にもとづいて）相手にはたらきかける、その本体（↓客体）

② 相手に影響されず、主体性を持っているようす。主体性（名）

自分の考えや立場をはっきり持ち、まわりからの影響を受けずに動く性質。

自主（名）

独立して、他から保護（さしず）を受けないこと。

（三省堂国語辞典 第三版）

このことから、自主的に取り組む姿とは、「やるべきことが明確で、その行動を率先して行っている姿」と言える。読書を例に考えてみると、「朝の読書の時間」など、読書すると設定された時間に指導者に言われなくても本が準備できたり、読み始めたりする姿である。

一方、主体的に取り組む姿とは、「やるべきことが明確でなくても、自分で考え、目的を持って取り組む姿」と言える。読書を例に考えてみると、その目的や意義を自分で認識し、朝の読書の時間などの決められた時間以外にも、読書をする姿である。それは家庭における読書生活、さらに中学校卒業後の読書生活を自分の意志で切り拓いていく姿につながる。

「主体」は「自主」を含む上位概念である。そうして振り返ってみると、私は、自主的に取り組む姿だけで満足していたように思う。学習や読書に取り組んでいればそれで良しとしていた。もちろん自主性を獲得しなくては、次のステップである主体性にはたどり着かない。だがいつまでもその段階に生徒を留まらせているのは、私自身の指導力不足である。今求められているのは、「自分で考え行動できること」である。そのために必要なものは「内発的動機づけ」だ。生徒が、自分で見つけた目的や意義を、自分の中に明確に持つことだ。私は、目標設定や評価をする際「外発的動機づけ（褒美・ペナルティ）」しか生徒に示してこな

かったのではないか。これでは短時間、短期間しかその意欲が続かなくても当然である。

このような反省から改善のための具体的な手立てを考えた。

○ 魅力ある課題提示をする。

○ 目的や意義について自分の考えを獲得するよう仕向ける。

○ 学習や読書などへの取り組みの姿勢を評価する。

○ 全員参加できることと同時に、自分で方法を考え表現を工夫することも考慮した活動内容、方法（ワークシート）にする。

○ 「自分らしさ」を互いに認め合い、表現し合える仲間づくりをすべての教育活動を通して行う。

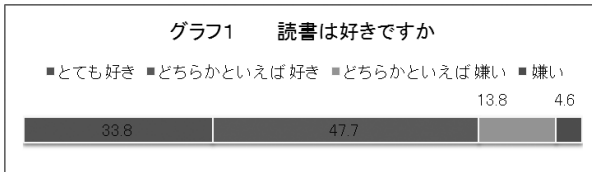
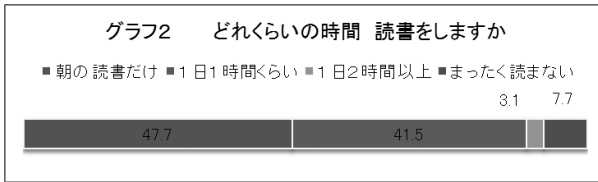
これらを意識した取り組みの中から、今回は「読書」「図書館」に関するものと、そこから見えてきたことを紹介する。

3 実践紹介

(1) YOM NOTE 「読むこと」記録ノート

四月に本校三年生の読書に対する意識をアンケートした。(グラフ1)「読書は好きですか」の質問において、「とても好き」「どちらかといえば好き」の回答を合わせると八割を超える。朝の読書も定着しており、朝の会のあとの十分間、静かに取り組むことができ

いる。ただし、グラフ2に見られるように、読書をするのが「朝の読書だけ」という生徒も五割近くいる。「主体的な読み手」を読書において当てはめるとき、読書生活のステップアップを促す必要があると考えた。



そこで、三年生を対象に「記録ノート」をつける活動を今年度から始めた。読書だけでなく、新聞なども含めた「読むこと」を推進したかったため。タイトルを「YOM NOTE (ヨムノート)」とした。

【手引き：目的について】

はじめに、目的を四点示した。

「読書の幅を広げる、読書の質を深める」

(↓それによって本に親しむ態度が育つ。)

「自分(の読む生活)をふりかえる」

(↓それによって自分を知ることができる。)

「読むことを通じて交流をする」

(↓それによってお互いを知ることができる。)

「大人になっても読書をする・新聞を読む」

(↓それによって「今」が「未来」につながる。)

学力向上、成績向上に直結する目的は示していない。生徒にとつて魅力のある提示なのか不安ではあったが、生徒たちは「なるほど」「言われてみればそうだ」「(読書は)いいことなんだ」などと感想をもらし、個々に意欲を持てた。もともと読書が好きな生徒が多いので、結果としては当然かもしれない。ただしこれだけではまだ内発的動機づけと言えないものではない。活動の中でその意義が実感できるようにすること、根強く習慣化することが必要だ。

【手引き：書き方について】

次に、国語の授業で扱った「5W1H」を元に、書き方を下のように示し、説明した。

【ノート作り】

実際にノートを作成する活動は学校図書館で行った。気をつけた点、工夫した点を挙げる。

When 【いつ】

朝の読書の時間、国語の時間の前、休憩時間、帰りの会での学習時間（月曜日）、家での時間などに書きましょう。少しずつでも書き続けることが大事です。

Where 【どこ】

学校でも、家でもOK 学校に置いていてもOK

Who 【誰】 自分でどんどん進めましょう。時々先生が読んで、コメントを書かせてもらいます。お互いに読み合う場面も作る予定です。

What 【何】

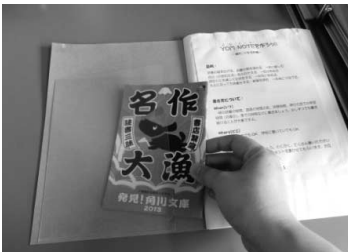
- ①読んだ本
- ②これから読みたい本
- ③読書なんでも！
- ④新聞記事切り抜き&感想

Why 【なぜ】 目的の欄のように、必ずプラスの成果がでるからです(^o^)

How 【どうやって】

1項目1ページを基本とします。記録は、印刷してあるワークシートを使ってもいいし、自分で書いてもいいです。紙は必ずのりづけしましょう。のりは準備してありますので、遠慮なく使ってください。新聞記事、本の帯、しおり、チラシ、パンフレットなど、貼れるものはどんどん貼りましょう！イラスト、カラーも大歓迎！

- ・ノートは帯の色や罫線の幅などが違う4種類を準備し、自分で選ばせる。
 - ・表紙はシンプルなものにし、タイトルなどのデザインに自由度が高まるようにする。
 - ・「手引き」は必ずノートに貼る。紙はA4を半分にしたサイズに揃え、貼ったときはみ出さないようにする。
 - ・B6サイズのクリアポケットを表紙の見返しに両面テープで貼り付ける。これは本の帯やパンフレット、新聞の切り抜きなどを入れておくためである。
 - ・みんなで作ることで時間や経験の共有をする。
- 学習活動は最初が肝心である。生徒自身が自分で準備を進める中で、「これならできそう」「楽しそう」と感じられることを大事にしている。
- またノート作りひとつとっても、「自分らしさ」を發揮できる場面である。例えばクリアポケットは、貼る位置を統一するのではなく、目的を示すだけにとどめる。すると、ポケットの閉じた方を端に寄せて貼る生徒と、開く方を中央に寄せて貼る生徒に分かれた。それぞれに根拠を尋ねる



と、前者は「大きな切り抜きでも収納できるから」「表紙の端が頑丈になるから」「表紙の端が頑丈になるから」「表紙の端が頑丈になるから」だと答えた。後者は「物が落ちないように」「パンフレットはそんなに大きくないと思った」と答えた。中には、付箋を台紙ごと見返しに貼り付ける生徒もいた。この付箋は、引用をする部分を、読みながらチェックしておくためである。



このように、生徒はささやかなことでも自分なりの根拠を持って行動している。それらを見逃さず、評価するチャンスをおかしていききたい。

【生徒のノート紹介と考察】

ノートに記録する内容は、本の基本情報などを必須とし、あとは自由である。基本情報とは「著者名」「出版社名」「発行年月日」「価格」「読み始め（年月日）」「読み終わり」とし、その他に書く内容例として「入手方法・きっかけ」「読後感」「わからなかった言葉」「引用」を示した。

「読んだ本」「読みたい本」の記録用に簡単なワークシートも準備した。学校図書館にストックしており、いつでも何枚でも取って良い。数枚をクリアポケットに常備している生徒もいる。生徒のノートの紹介と、

そこから見えてくるもの、考えられることを述べる。

「入手方法・きっかけ」

・「書店で見つけました。帯の『アガサクリステイ賞受賞作』にひかれたので。」

（森晶磨「黒猫の遊歩あるいは美学講義」）

・「市民図書館でございました。」

（阿世賀浩一郎「エヴァンゲリオンの深層心理」）

・「お母さんが市民図書館で借りてきて、『読んだら』って言ったから」

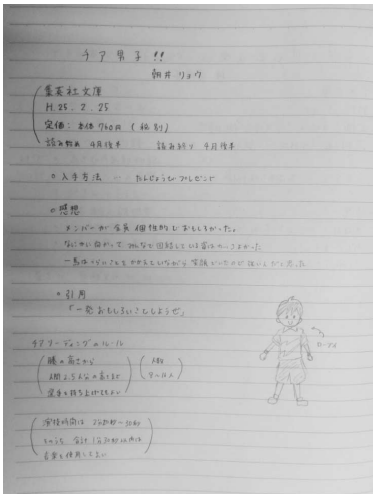
（辻村深月「サクラ咲く」）

・「この本も県立図書館で借りました。」

（三浦正幸「日本史100城」）

・「ドラマです。学校の図書室にありました。」

（有川浩「空飛ぶ広報室」）



・『中学生の読んでほしい30冊』でおもしろそうだったから、図書室でさがしたらあった！1日で読み終わった〜！

(梨木香歩「西の魔女が死んだ」)

・「おばあちゃんに借りた。」

(林真理子「今夜も思いだし笑い」)

・「たんじょうびプレゼント」

(朝井リヨウ「チア男子!!!」)

・「いとこが遊びに来て『これ読んで』と言われたから読んであげました。」

(島田ゆか「ぶーちゃんとおにいちゃん」)

・「2年生のとき『走れメロス』を読んで他のものも読んでみたいと思って古本屋に行ったら100円だった。」

(太宰治「人間失格」)

・「ネットで買った。」

(小竹正人「空に住む」)

・『「海の底」の解説で紹介されていました。学校の図書館にないので、学校で市民図書館に借りてもらいます。」

(フランク・シエッツィング、北川和代・訳)

「深海のムク」※読みたい本についての記述より)

これらの記述から、本の帯から情報を得られることを知り、帯に着目できたこと、授業で扱った作品から

同じ作者の他の作品へ興味が持てたこと、読書案内の小冊子を活用していることなどがわかる。国語の時間を通して身につけた力が、生徒の読書生活にかされた姿と言える。

生徒の読書生活について、このYOM NOTEを讀んで初めて知ったことも多い。例えば、境港市図書館を利用する生徒が多くいること、鳥取市にある県立図書館に行く生徒もいることは私にとって驚きであった。公共の図書館を利用する中学生が多いことはたいへん喜ばしいことだと思う。これは公共図書館の努力の賜とも言えるが、境港市という環境要因が影響しているとも考えられる。市内に本格的な「書店」は一軒しかない。雑誌やマンガはコンビニなどでも手に入るが、読書用の本となるとそうはいかない。そんな中で、市民図書館の果たす役割も大きいのであろう。ネットで購入するという手段も浸透してきており、生徒を取り巻く読書環境が変化しているのがわかる。

また、記録の中には「家族」の姿が見られる。兄弟姉妹という近い世代での貸し借りだけでなく、親や祖父母といった世代を超えた交流があることが感じられた。境港市図書館連絡協議会が毎年開催している、境港市読書推進大会「境港市読書まつり」のテーマは「赤ちゃんから大人まで本で楽しいひとときを」である。この推進大会は今年で九回目となる。この大会が始まったとき、生徒たちは小学校に入学した。市を挙

げて行われてきた活動により少しずつ培われた感覚が家庭にも根付き、今つぼみをつけている段階なのかもしれない。

このようにYOM NOTEを通すと、読書の意義、目的は学校で獲得するとは限らないことがよくわかる。家庭、地域も含めた生徒の生活圏内すべてに、そのヒントはちりばめられている。私たちにとって、意義や目的自体を示すことが重要なのではなく、彼らがそれを自分で獲得できるように、周囲に目を向けさせ、自分で考えさせることが重要である。生徒自身が自分の読書生活をふりかえり、そのヒントをもとに自分で考えるためにYOM NOTEはたいへん有効であると考ええる。

【引用】

・「わたしには決めていることがある。いつか大人になって高校時代のことを話すときがきたら、あのかの苦労話や努力の軌跡は決して口にしないよ。」
（初野晴「空想オルガン」）

・「人生は、高い壁にぶつかるから楽しいではないか。その壁を前にしていかに対処し乗り越えていくか。そして何とかその壁をクリアする。この過程こそ人生の醍醐味であり、真の喜びなのだ。」
（遠越段「桜木花道に学ぶ」超「非常な成功のルール48」）

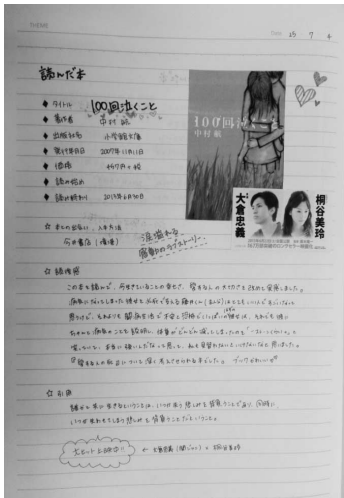
・「誰かと共に生きるということは、いつか失う悲しみを背負うことであり、同時に、いつか失わせてし

まう悲しみを背負うことだということ。」

（中村航「100回泣くこと」）

これらの「引用」は、ひとりの大人として読むとき、私自身にもたいへん魅力的なことばたちであった。あらためてことばの力を感じられる。教員としての視点からこれらを読むと、「彼らがどうしてそのことばに惹かれ、選んだのか」という思いが浮かぶ。

例えば「空想オルガン」からこのことばを引用した女子生徒は、吹奏楽部に所属しており、それがこの小説を選ぶきっかけにもなったようだ。部活での悩みや人間関係のちよつとした諍いもあったらしい。そんな彼女の「苦労話」「努力の軌跡」とは一体どのようなものなのか。引用したことばによって、彼女の現実にとどのような影響が与えられたのか。さらには、この引用を同じ部活の仲間はどう感じるのだろうか。



また、二つ目のことばを引用したのは男子生徒である。彼が人生の「高い壁」にぶつかったとき、このことばを思い出すだろうか。三つ目のことばを引用した女子生徒は、共に生きる「誰か」と出会ったとき、このことばを思い出すのだろうか。

引用する力それ自体も「読むこと」には必要な力であり、国語の授業でつけるべき力だ。そこからさらにそれらを活用した、国語の授業作りや仲間作りの可能性も感じられる。これからの彼らの人生に、本で出会ったことばがどう作用するかも興味深い。とっておきの材料がYOM NOTEの中に蓄積されている。

「読後感」

・『海の底』の冬原さん、夏木さんそれぞれの恋愛編と『空の中』の光木さんたちの恋愛編など、自衛隊ではたらく人たちの恋愛を描いた短編集でした。私としては『海の底』『空の中』を読んでから読むのがおすすめです。さすが有川さんの恋愛小説は激甘だぜ！

(有川浩『クジラの彼』)

・「最初の話から最後の話がきちんとつながっていませんでした！256ページまで読むときとすべてが分かります！こういうタイプの小説は初めて読みました！」

(辻村深月「サクラ咲く」)

・「なんか時間を忘れるくらい本にひきこまれる！！！自分が思っていたオチとちがったオチで、最後まですぐおもしろかったし、ラストを読んだあとに一番最初を読んだら内容まるわかりっ！なるほどねっつて☆山田さんのリアルおにごっこも読んだけど、それよりもおもしろかった！」

(山田悠介「スイッチを押すとき」)

・「最初読んだとき、プロローグの始まり方が現実をとらえていて、物語が思い出をつづっているダイアリーだということに気がつきました。すると主人公結衣の素直な想いがそのまま日記に書かれていて、すごく本の世界に入っていました。」

(和泉あや「恋の唄」)

以前読んだ同じ作者の作品と比較する、文章構成からおもしろさを見つける、表現の仕方から感じられるおもしろさを見つける、といった姿が見られる。読書に「こう読むべきだ」という「絶対」はない。しかし、作品の魅力や作者の工夫などに気付けるような「読み方」を国語の授業を通して学んだことで、生徒たちは自分の読書にもそれらをあてはめ、おもしろさを自ら分析できるようになる。本を「食材」とするならば、国語でつける力は「調理法」である。たくさんの「味わい方」を学び、自分でそれらを選び活用できるようにするのが、学校の役割だとあらためて感じた。

【活用】

こうして記録しているYOMI NOTEは、記録すること自体にも価値があるが、それらの活用もさまざまな教育活動で可能である。

まず考えられるのが、国語科での活用である。「中学校学習指導要領解説国語編 平成二十年九月」にある、「読書と情報活用」に関する指導事項と「C 読むこと」の言語活動例をあとに示す。

第1学年言語活動例のウであれば、読書記録をつけている中から、課題に合う本を探して紹介する活動ができる。そのときには、相手意識を持って引用をすることを学べるだろう。再読する中で新たな味わいにも気付くはずである。

第3学年言語活動例アの指導の際には、今まで自分の好みで選んでいた本に、「批評」という視点を持って向き合うことで、さらに読書の幅が広がる。ウにおいては、読書記録をつけているからこそできる、「振り返り」があるだろう。中学校生活の思い出とともに、そこにあった自分と本の時間が、鮮やかに思い出されるのが期待できる。

言語活動例	指導事項	
		第1学年
		第2学年
		第3学年

また、国語科だけでなく、仲間づくりにも活用できる。同じ本を読んだ仲間がいる。自分がすすめた本を読んだ仲間がいる。それは自己肯定感にもつながる。「仲間づくり」「主体性」に欠かせないキーワードだ。

どのように交流するかは工夫のしどころである。今年度は、ノート一冊をすみずみまで読まれることに生徒の抵抗感があったため、一部掲示することで交流とした。文化祭の教科展示では他学年の生徒からの反応も大きく、学年を超えた交流の可能性を感じる。

また、このYOM NOTEを、これから本校に入学する小学校六年生が読んだら、どう思うだろう。中学校に不安を感じていた児童も、入学し図書館を利用するのが楽しみになるかもしれない。同じ本で話をしてみたい先輩ができるかもしれない。小学校のYOM NOTEをつけていたら、「読みたい本」を中学校で準備しておくことも可能だ。「あなたの入学を待っていた」という歓迎の気持ちの本で表現できる。こうすることで、学校図書館が小中連携の一つのパイプとなれる。



(2) 委員会の活性化

境港市教育委員会から提示された、「境港市学校教育推進の重点」のひとつに「生徒会の活性化」がある。これも「主体性」がキーワードとなっている。本校には六つの「専門委員会」があり、その中で図書館の運営に関わるのは「文化図書委員会」である。今回は、今年度行った委員会活動の中から、二つ紹介する。

①学級文庫の整理

委員長から、今月の目標として挙げられた目標「本の整頓をしよう」をうけての活動である。委員長は自分のクラス・学年だけでなく、放課後全クラスを調査した結果、この点に課題意識を持った。環境整備の観点からもちろんのこと、「整頓されていない」と本を手取る気持ちが減退する」というのが委員長の考えであり、委員会担当教員である私や学校司書と相談の上、この目標を設定した。委員長は整理の方法も提案しようと考えていたが、具体的な方法は委員会で話し合うことにした。

話し合いの手順として、はじめに各学年で学級文庫が乱れる原因について話し合った。すると、

1年生：「本がまっすぐ立てられないから」

2年生：「注意する人がいないから」

3年生：「みんなの意識が低いから」

と、それぞれに原因を分析した。

次にその解決法を考え次のような「作戦」を立てた。

1年生：「ブックスタンドを図書館から借り、本を
まっすぐに立てる」

2年生：「朝の読書のあと、交代でクラスを回り、
点検、整頓を行う」

3年生：「啓発のためのポスターを文庫棚につけた
り、終わりの会で呼びかけたりする」

3年生のポスターについては、テレビのニュースで
「見られている」という意識が犯罪の抑制に効果的だ
ある」という情報を得て、それをいかせないかと提案
した生徒がいた。その結果、目をデザインして自分た
ちの目の高さに貼る、キャッチフレーズを「見てます
よ」とするといった、目的達成のための工夫を凝らし
ていた。

次月には活動成果の報告や反省を行った。ブックス
タンドは、それを置くだけでは使いにくく誰かが整頓
しなくてはならなかった。点
検当番は最後まで続けること
ができなかった。ポスターや
呼びかけも1ヶ月後には効果
が薄らいでしまった。

活動に失敗はつきものである。
大事なところはそこから何を
学ぶかである。この活動で重
要なのは、生徒自らが方法を
考え、行動したという点だ。



この会では、他学年の報告を熱心に聞く姿や、次の解
決法を考え、試そうとする姿がうかがえた。完全解決
をした学年はないものの、手心えは全員が感じており、
活気のある時間となった。

これまでの委員会活動は、当番の確認や情報伝達の
場になりがちであった。委員長が考えてきた活動を、
そのまま委員が実行することが多かった。今回の活動
では、問題提起をするにとどめ、その方法を学年で話
し合うことが「主体性」につながったと考える。トラ
イ&エラーを繰り返しながら、生徒は学ぶ。現在も文
化図書委員会では解決法を模索中である。

②図書館マップ

本校は、今年九月に校舎移転をした。新しい図書館
は円形で、どの方向からも光がふりそそぐ明るい空間
である。委員会も後期に入り、委員長を始め、メンバ
ーも新たに活動している。

後期の委員長は「図書館マッ
プ」を作ることを公約にして
いる。「新しい図書館に今ま
で以上にたくさん生徒に来
てもらいたい」という願いを
もとにした活動計画である。

活動するにあたっては「図書
館マップ」の使い道や情報量、



委員生徒の具体的な活動内容などを、委員長と話し合い、実行した。

学年ごとにエリアを割り振り、分担を相談して、棚ごとに吹き出し型のカードに情報を書き込む。そこにどんな本があるかだけでなく、どういう人におすすめか、どんなときに便利かなども書くとういと促した。円形である分、入り口からでは気付きにくい棚や普段足を運ばないコーナーもあり、委員自身にも発見があったようだ。これから調べ学習で使うコーナーを該当学年に割り振ったので、活動のときに文化図書委員がクラスで活躍する姿が見られるかもしれない。今回は学年でエリアを分担したが、今後は学年同士が交流する形で担当してもおもしろい。三年生がリーダーシップをとることで、生徒の活動に「主体性」がさらに育つチャンスとなることが期待される。

完成した「図書館マップ」は、現在図書館入り口に貼ってある。委員会活動の一つである「図書館だより」に部分的な掲載もする予定である。今後本の配置を大きく変えることはないが、書き入れるコメントは担当する委員によって違う。年度ごとに更新し、啓発活動の一つにしていきたい



い。

ところで、これらの活動をするときに、主体性を強く意識するあまり、生徒になんでも任せきりにするのは、誰のためにもならないと感じている。今回の「図書館マップ」においては、委員長に明確なイメージはなかったが、さまざまな実物を見ながら、どんなマップを作るかを練り合わせていった。知識や情報を持たないままでは、考えようがない。それを力不足と評価する前に、その願いや意欲を評価すべきである。情報収集の過程が目的でなく、その先に目的があるときには、教師側からの情報提示は支援のひとつであると私はとらえている。

文化図書委員会の活動では、学校司書との連携が必要不可欠である。「図書館マップ」においても、事前に棚ごとに分類番号やジャンルを書いた掲示を貼っていただくだったので、活動や分担がスムーズに行えた。委員会の時間だけでなく、委員長との打ち合わせにも必ず同席し、サポートしてくれる頼もしい存在だ。鳥取県では司書教諭に週五時間「図書時間」が確保されている。こういった時間を有効に活用しながら今後も運営していきたい。



3 おわりに

読書は、今や単なる娯楽にとどまらない。主体的に獲得すべき学習行為である。「中学校学習指導要領解説国語編 平成二十年九月」には次のように書かれている。

読書活動は本体読み手の個人的な活動であり、自
主性や自発性を尊重することが重要である。しか
し、生徒の読書に対する興味・関心は多様である
ため、個に応じた、計画的かつ継続的な指導によつ
て読書を価値あるものとして認識させることが大
切である。

また、秋田喜代美氏は、次のように述べている。

「強制すべきではない」という言葉は、「自発的
にするもの」「みずからするもの」としてとらえ
られ、生徒個々人が行動を始発する「自発性」と
直結して考えられがちです。しかし活字に出会う
読書の入り口においては、本を読むきっかけを自
分で作るように任せておくだけの「始発性」を意
味する自発性よりも、教師の導き、誘いによつて
「読み通す、読み込む、作品と自己内対話する過
程」にかかわる「主体性」が発揮される場を、学
校や授業できちんと一つずつ作り出すことの方が、

現在の一見読書とは距離があるように見える中高
生が読書する入り口としては重要であることが示
唆されています。

YOM NOTEや学校図書館からの啓発を通して、

「読み通す」ことで見えてくるものを確認し合ったり、
「読み込む」ことで育つ心を互いに認め合ったりしな
がら、義務教育修了後にも「作品と自己内対話」し、
人生を彩り豊かに送れるような生徒の育成に、これか
らも尽力したい。

本稿は島根大学教育学部国文学会研究発表会フォー
ラム「私の国語教室」における実践発表をもとにまと
めたものである。協議の中で「最後まで読む態度を定
着させる手立て」「読書の幅を広げるための手立て」
について、参加者のみなさまからご意見いただいた。

その中の「表紙が破れていたり、汚れていたりした
ら手に取らない」「(同じ本でも)古いものより新し
いものを選ぶ」といった感覚は、中学生も持っている
ものである。データ上「本がある」ということだけに
満足せず、その本の状態にも目を留め、管理すべきだ
とあらためて気付かされた。

また、「ライトノベルから本格への移行には、共通
する作者に着目することが有効ではないか」というご
意見とともに、桜庭一樹や乙一を紹介していただいた。

図書館でのディスプレイのとき、それらの作者を意識するようになり、生徒への声かけも変わってきた。

このような機会をくださったみなさまに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(境港市立第二中学校教諭)

参考文献

● 文科省『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版・2008

● 杉本直美『自立した読み手が育つ読書生活デザイン―子どもが変わる読書指導―』東洋館出版・2010

● 秋田喜代美・庄司一幸『本を通して世界と出会う 中高生からの読書コミュニティづくり』北大路書房・2005

